

# 巻 頭 言

## 東日本大震災抄考

仙台青葉学院短期大学学長  
藤 村 重 文

2011年3月11日14時46分に発生した東北太平洋沖大地震と巨大津波による東日本大震災は、東北地方沿岸地域の壊滅的被害に加えて、国民の大部分が夢想もしなかった原子力発電所の水素爆発や原子炉メルトダウンという大事故を惹起した。ここで国民の大部分といったのは、巨大地震と巨大津波が貞観時代869年にあったという史実を、かつて政府の委員会で発言した委員がいたためである。委員会の大勢はその発言を無視し看過した。

東日本大震災被災地や被災者に対する日本全国からの支援は日を追って広がりを見せ、このことは日本社会の連帯を身近に感じさせる。さらに大震災は、日本全体の現代社会における精神のありかたに対して進歩的あるいは復古的な意味で影響をもたらしたようにみえる。

大震災経験後の数カ月間に実感したことは、発災後被災地へ政府に先んじて日本中から寄せられた様々な支援に対する現地の人々の対応や態度の奥床しさであった。感謝の念の強さや過酷な状況における寡黙さと忍耐強さ、そして他人を忖度し譲り合うことなどが強く印象に残った。

震災被災地を含む東北地方の人々の文化としての精神構造に影響を及ぼしているのは、和辻哲郎が80数年前に「風土—その人間学的考察」のなかで人間存在の規定因子のひとつであるとしているように、ひとつには風土性であろう。風土性を概略的に述べるのは困難であるが、和辻は、人間存在の風土的特性として、モンスーン・砂漠・牧場の三つの類型をあげ、モンスーンの風土の特殊形態として日本を取り上げ、その中で日本人には受容的・忍従的なモンスーンの性格に、「思い切りのよいことと淡泊に忘れること」という美德ともされるような性格が加わっているとも述べている。日本のなかで東北の厳しい風土は、さらにその地域に特徴的な精神社会を形成したのではないか。

日本のみならず世界各地の情報入手や交通が時間的制約なしに可能になった今日においても固有の精神文化を維持していくという地域が存在するのは、祖先からの生活の歴史を大切にするという古来の日本人の本性に由来することによると思う。